

私の一文字「拓」

副代表幹事
小柴 満信

JSR
取締役会長



日本企業の生き残りのため道を“拓く”

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。今回は、小柴満信副代表幹事にご登場いただきました。

小柴 私は悩んだ末に「拓」を選びました。JSR創立50年記念史のテーマ「未来を拓く」が理由の一つです。弊社は半官半民のような形で始まりましたが、常に新しい領域を切り拓いてきたと思うんです。私自身も34歳で渡米し、米国で市場を開拓するために会社をつくって道を拓いた。その意味でも、「拓」が一番合っているのかなと思いました。

岡西 米国で何もないところから成果を出したのは、まさにこの文字そのものと感じます。「拓」は手偏に石と書きますが、手で石を拾うという意味もあります。手で石を拾い、未開拓の道を拓いていく。力強い文字でもありますので、手でグッと握るような書体をイメージして書きました。

小柴 素晴らしいですね。

岡西 小柴さんが渡米されたのは1990年。日米半導体摩擦が激しかった時代にM社やI社など、名だたる半導体メーカーから受注を取り付けられたのは、まさに「拓く」の精神ですよ。

小柴 きれいに言えばそうなんです、簡単に言えば、私は負けず嫌いなんです。モノを売るの大好きです。

岡西 モノが売れないのは技術が悪いのではなく、売り手側の問題なんだ、という小柴さんの記事を拝見しました。

小柴 私たちは自社商品を高付加価値商品と言っていますが、こうした商品は、会社なり私たちが信じて買ってくだ

さるのです。最高のセールスは、まだモノがないのに売れている状況をつくること。それは本当に起きるんですよ。

岡西 究極ですね。モノを見ないで買うのですか。

小柴 それは、お客さまの「絶対にこれがなければ困る」という必要を理解していないとできません。それを理解していれば、われわれにできることは分かりますので。

岡西 信じていただくことは大切ですね。経済同友会における小柴さんの「拓く」の思いもお聞かせいただけますか。

小柴 現在「グローバル・ビジネスリーダー対話推進TF」の委員長代理をしています。今、企業は政治にも経済にも先端技術によって制限を受ける境界条件が増えています。特に、政治的な枠組みが変わってきている中、国境を越えた企業同士の信頼関係を頼りに経営していかなければならない。世界のビジネスマン同士の関係も変わりつつあり、そういう形の新しい対話やその仕方なりを「拓いて」いきたいと思っています。

岡西 JSRの会長としてはいかがでしょうか。

小柴 昨年会長職に就きましたが、決裁の権限はありません。今やっていることは、日本の企業が今後世界で残っていくための底上げです。アジアの地政学が明らかに変化する中で日本がリーディングポジションを取り返すことができるのはこの2、3年でしょう。私の目標は、東京を中心に日本の競争力を再構築することです。個人の力でどこまでできるか分かりませんが、民間でできることをやっていきたい。Do Tankとしての経済同友会のメンバーとして、いろいろなチャンネルを使いながら道を「拓く」つもりです。



書家
岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。